モデル事業名	地域資源を活かした持続可能なコミュニティ創造事業（通称：ゆいむすび事業）
活動団体名	特定非営利活動法人　きびっとの杜
ホームページ	http://www5.ocn.ne.jp/~kibit/
所属／担当者名	理事長　成　冨　由　久
連絡先	電話：０９４２－９２－２０７３　　Email：y.naritomi@heart.ocn.ne.jp
活動地域	

● 活動地域の概要

佐賀県三養基郡基山町宮浦地区は、町内で世帯数が少ない中山間地区で、特に高齢化が進む一井木集落を対象としています。この地区は、農業の担い手の高齢化により遊休農地も年々増加している地区でもあります。

（1）人口　　５４名（宮浦地区：７５４名、基山町全体１８，１６９名）
（2）世帯数　　１７世帯（宮浦地区：２１７世帯、基山町全体6，１６２世帯）
（3）高齢化率　４６％（宮浦地区：２１％、基山町全体１９％）

【位置図】

【荒廃が進む中山間地域※】

【植林を行い整備された里山】

● 活動地域の課題

基山町宮浦地区は、町内で最も世帯数が（２１３世帯）が少ない中山間地区であり、農林業従事者の高齢化や担い手不足により耕作放棄地（遊休農地）や孟宗竹による山地の荒廃が進み、数年で限界集落となる可能性が高い地域である。このような状況を打開するために、２００３年この地区の住民が主体となってボランティアグループを結成し、地域づくり活動を開始しました。

活動を行う中で、次のような課題が出てきました。①休耕田の利活用のための地権者の理解と協力　②地域資源（人・モノ・金・情報・技・歴史・地勢）の再発見と活用　③環境負荷及び経済負担の少ない活動拠点整備　④持続可能なコミュニティのための経済活動の創出

● 活動の内容

・平成２０年度

１．遊休農地利活用等ワークショップ

このワークショップは、遊休農地・荒廃山林を利活用する上でのカルテを整備し、課題ケースごとに利活用対策案を立案検討することを目的として、佐賀県基山町宮浦地区の中で中山間地域の遊休農地を対象に現地調査並びに利活用対策案の検討を行いました。

２．地域資源再発見と活用プランづくり

このワークショップは、７つの視点（人・モノ・金・情報・技・歴史・地勢）で再発見した地域資源を、５つの鍵（衣・食・住・学・遊）利活用プランを検討しました。

当初、対話によるワークショップを中心に考えて活動しましたが、様々な地域資源について話しをするうちに、実際に作業をしてみようという機運が強くなり、竹の茶室づくり、花咲かせ隊の発足、企業やボランティアグループとの連携した地域資源づくりに取り組みました。

３．環境負荷・経済負担の少ない活動拠点整備の構想

このワークショップは、持続可能なコミュニティ創造のための拠点作りに必要な資源調査を行い、地域資源を活かした拠点整備とその運営形態や法人化等について立案することを目的として活動しました。

当地区が持続可能なコミュニティを創造する上で、自治会活動の状況やコミュニティ・ビジネスの可能性についてア

クション・ラーニングを用いて潜在的な地域の問題点の顕在化を試み、その結果どのような拠点整備や運用形態が望ましいのか考察しました。

４．情報の共有化と持続可能なコミュニティ創造のためのプランづくり

このワークショップは、各ワークショップでの情報共有化と持続可能なコミュニティ創造のためのプランを立案することを目的として活動しました。

ＮＰＯ会員が取り組んだ３つのワークショップ「遊休農地利活用等ワークショップ」「地域資源再発見と活用プランづくり」「環境負荷・経済負担の少ない活動拠点整備の構想」において出されたアイディアを振り返るとともに持続可能なコミュニティ創造のための仕組みづくりについてプランを考えました。

・平成２１年度

平成２０年度の事業の成果・課題を整理した結果にもとづき、高齢者による休耕地の保全活動を行うとともに、新しい魅力づくりを多様な人たちとの交流により実現し、持続可能なコミュニティづくりに取り組んできました。

１．農地保全と竹バイオマス・ワークショップ

（１）目的

孟宗竹に侵食された農地を、耕作可能に復元するためには大掛かりに伐採する必要がありますが、伐採した後の孟宗竹の処理をどうするのかが大きな課題であります。活用には、竹細工や竹炭に使うことも考えられますが、使用量は限られていますので残りは焼却処分になっていました。

そこで、伐採した大量の孟宗竹を有効に活用し、遊休農地保全のための持続可能な維持活動として竹バイオマスのコミュニティ・ビジネスの可能性を検討することを目的に実施しました。

（２）実施状況

具体的には、６月に農地保全と竹バイオマスについてワークショップを行い、孟宗竹のチップ化による堆肥としての活用について実証実験を行うための具体的な議論を行いました。伐採は、これまで人力により行ってきましたが、高齢者にはつらい作業が続くため持続的に活動を行うためには機械化できないものかという検討を行い、重機により伐採を行うことを調査することにしました。８月には、機械化による孟宗竹の伐採とチップ化更には堆肥化の先進地研修を行いました。

孟宗竹に侵食された農地の孟宗竹を、竹の成長が止まった時期（９月）に伐採を実施しました。伐採は、これまで人力により行ってきましたが、今回は自走式の重機による伐採とチップ化を行いました。その後、休耕地に堆肥化するために堆積し、撹拌を行ってきました。

（竹肥料勉強会の様子）

２．新しい地域魅力づくりワークショップ

（１）目的

これまで放置されてきた遊休農地を耕作可能な状態に保全した農地を、地域の新しい魅力を作り出し幅広い世代が交流する拠点作りとして３つのワークショップを行い、コミュニティ・ビジネスの可能性を検討することを目的に活動を行いました。

（２）実施状況

① 石釜づくりワークショップ

地域の新たな魅力づくりと様々な地域間・世代間の交流を目指して石釜づくりに取り組みました。

６月から石釜づくりのワークショップをはじめ、具体的な内容を検討しました。石釜の設置場所は、当法人が最初に公園作りを手がけたきびっとの森公園とし、春には「さくら祭り」を行っている場所でもあり、今後の利活用に最も適していると判断しました。

７月から石釜づくりに取り掛かりましたが、石釜づくりについては初めての試みであり、いろいろな所に視察を行い基礎から勉強し石釜づくりを行いました。８月、９月と暑い最中にも試行錯誤を重ねながら石釜づくりを進め、９月の末にようやく完成しました。

（石釜づくりの様子）

石釜づくりを行う中で、様々な人に関心をもってもらい参加してもらいました。また、マスコミへも積極的に情報提供を行い、町内だけではなく県内外の広範囲にわたって情報発信を行いました。

② 食育ワークショップ

これからの時代を担う子供たちに、自然の豊かさと素晴らしさを体感してもらうため、さらには、実際に育っている野菜を手にとって食べ物のことについて感じてもらうために活動を行いました。

春には、孟宗竹の竹林を竹の子の山として整備し、幼稚園の子供たちに竹の子掘りの体験活動を行いました。子供たちは始めての経験で、親御さんの方々と竹の子掘りを通じ自然を満喫していました。

また、石釜の完成後には保全整備した休耕地で育てた野菜を使っての石釜ピザや、米粉を使っての石釜パンを子供たちと楽しみ、食育教育の活動を行いました。また、ＴＶゲームやパソコンに慣れた子供たちに、昔ながらの紙芝居を体験してもらいました。

③ 特産品づくりワークショップ

保全整備した休耕地を使い新しい地域特産品となる加工品づくりのワークショップを行いました。昨年植えた菜の花は、春にはきれいな花を咲かせ地域住民の方々や、ウォーキングをされる方の目を楽しませてくれました。その菜の花から油を絞り取り、菜種油として販売しました。採取は会員の手作業で行い、採油は専門の業者に委託しパッケージ化しました。

● 活動の成果

・平成２０年度

（活動の成果、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入）

１．遊休農地利活用等ワークショップ

遊休農地となった主要な原因が、年代別にあることが判明しました。昭和30年代からの余剰米対策としての減反政策が実施されたのを機に、里地から離れた山間部の棚田を減反対象の農地とし、杉やヒノキが植林されました。しかし、間伐や枝打ちなどが行われていないために、その中に孟宗竹が侵食してきており荒れた山林となっていました。

平成になってからは、農業の後継者がいないために、農業従業者の高齢化が進み遊休農地化が進んでしまいました。また、自分の土地を他人に貸し出すことに消極的で、他者への活用も困難な状況であることがわかりました。

ただし、里地に近い遊休農地で有償による貸し出し可能となった畑地について、今回のワークショップ参加者の中から有機農業の実験を行いたいとの希望が出され、遊休農地の地権者の協力もあり実際に白菜、ミズ菜、小松菜などが栽培されました。また、水田の遊休農地には菜の花をまき、菜種油を採取してきました。

（荒廃した里山）

２．地域資源再発見と活用プランづくり

地域資源を再発見するには、７つの視点を用いてワークショップを行うことで視点が広がったという点では、今後もこの視点を活かした活動が有効であると考えられます。

竹の茶室を作ったことで新たな地域資源となったことは、物語性を活かすことが今後の地域資源を活かす上で大きな示唆がありました。また、「花咲かせ隊」といったプロジェクトチームが出来たことは、それぞれの意識や参加しやすい環境づくりの重要性を感じました。

５つの鍵（衣・食・住・学・遊）で利活用プランを検討することについて、日頃活動しているＮＰＯ会員を中心に行うと、思考パターンが同じ状況となりやすく、専門性を必要とするプランや経験を必要とするプランはなかなかアイディアが出にくい状況となりました。こうした状況を打開するためには、多様な経験を持った人や他の地域の人達の参加が必要であると考えられます。

３．環境負荷・経済負担の少ない活動拠点整備の構想

当地区が持続可能なコミュニティを創造する上で、自治会活動の状況やコミュニティ・ビジネスの可能性について検討を行い、自治会活動の閉塞感が地域全体に広がっていることが判明しました。このことは、自治会活動そのものが本来の住民による相互扶助や共同作業といった活動にも支障をきたしている状況でした。

こうした自治会の課題の解決するためには、地域住民が住民自治について学習する機会を継続して作ることが必要と考えます。また、高齢化が進む集落については、若い世代が魅力と感じるコミュニティ・ビジネスを創出することが必要と考えます。

４．情報の共有化と持続可能なコミュニティ創造のためのプランづくり

持続可能なコミュニティづくりには、高齢者が主体となって取り組むコミュニティ・ビジネスが必要であり、コミュニティ・ビジネスにより年金以外での収入の確保と生きがい作りにより生き生きとした暮らしや地域住民との関係づくりに大きな役割を果たすと考えられます。

また、循環する暮らし環境づくりは、手間がかかりますが安心して暮らす魅力づくりに必要な取り組みではないかと考え、暮らしの価値観をいかに変えていくのかが必要と考えます。

● 平成２１年度

（活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入）

１．農地保全と竹バイオマス・ワークショップ

伐採は、これまで人力により行ってきましたが、高齢者にはつらく危険な作業が続くため持続的に活動を行うためには機械化が必要と考え、重機により伐採・チップ化・堆肥化の作業を実施しました。パワーショベルを改良した竹伐採機で、鬱蒼と生い茂った孟宗竹の竹林の伐採を始めると、人力による数倍の速さで伐採が行われ、刈り取った竹の後片付けも迅速に行い、チップ化することが出来ました。

出来上がった竹チップは、人家に近い休耕田に堆肥化するため半年間熟成させるため堆積させましたが、竹チップは悪臭の発生もなく、一ヵ月に一度は完熟した堆肥を作るため撹拌作業を行いました。

（重機による竹チップ作り）

これから、持続可能な維持活動として孟宗竹の竹林の維持管理を行っていくためには、機械化をしながら効率よく負担を軽減する作業を行うことも必要であると考えています。

２．新しい地域魅力づくりワークショップ

① 石釜づくりワークショップ

石釜づくりは、基礎工事から会員の手作りで進めてきました。土木作業にされている会員もいましたが、いろいろな方々の手伝いを受けながら、試行錯誤をしながら専門家の指導を受けて完成することができました。

完成後は、マスコミへも情報提供を行い今回の取り組みのＰＲをした結果、大きな反響があり県内外から問い合わせが殺到しました。石釜が完成すると、地域の奥さん方が積極的に石釜ピザ・石釜パン作りに参加され、講師を招いてのピザ・パン作り教室も盛況の中実施しました。

毎年行っている植樹祭には参加者のプレゼントとして、早朝より石釜で焼いたパンを参加者全員に手渡しました。受け取られた方々からは、多くの喜びの言葉を頂きました。また、この石釜で焼いたパンやピザを販売できないかという積極的な意見が、パン作りに参加された奥さん方から出てくるなど、この石釜を利活用する方策が検討されてきました。

（植樹祭でのピザ・パン試食会）

② 食育ワークショップ

身近な自然を実際に体感することで、次代を担う子供たちに自然の大切さと必要性を感じてもらうことを目的に活動しましたが、笑顔で自然の中で遊びまわる子供たちを目のあたりにするとその成果は十分あったものと考えます。その自然の中で育つ野菜などの食べ物を、自分の眼で見て、触って、食べることにより、食べ物の大切さを伝えることが出来たと考えています。この活動を通じて、食育の教育がさらに進むものと考えます。

③ 特産品づくりワークショップ

この地域で、新しい特産品となる加工品を作るため、様々なイベントの中で物販を行い消費者の販売指向を研究してきました。農作物の特産品はどの地域でも多数の種類が販売されており、消費者の購買意欲を刺激する物をどう開拓するのかがポイントでした。

その中で出た答えとして、我々の自然環境保全という活動を通じ、荒廃した休耕地をもとの耕作地として復活させる取り組みをアピールしながら、安全でおいしいものを作って販売するという結論に達しました。また、顔の見える販売として、昨年から行っている「花咲かせ隊」による菜の花は、春には訪れる人に黄色のきれいな花を楽しませてくれ、秋には菜種として菜種油を採取し販売することが出来ました。この菜種油も新聞等で取り上げられ、県内外から多くの問い合わせがあり、すぐに完売するという好況を得ました。

●　今後の課題及び展望

・課題

農地保全と竹バイオマス活動では、これから持続可能な維持活動として孟宗竹の竹林の維持管理を行っていくためには、伐採した孟宗竹をチップ化し作物の育成に適した竹肥料として熟成させることが重要であると考えます。さらには、出来あがった竹肥料をどのように販売し、販路をどのように開拓していくのかが課題として出てきました。

新しい地域魅力づくり活動では、地域の新しい魅力づくりとして石釜を作り地域の新しい拠点としましたが、この石釜をどのように活用していくのかが課題として出てきました。石釜に興味をもたれている人は多く、このような方々をどのような形で取り込んでいくのか、興味をそそるような仕掛けを今後は考えていく必要があると考えます。

・展望

今年度行った様々な活動は、これまで当法人が行ってきた活動の延長線上にあります。活動の当初は、自然環境保全のため、荒れた里山の整備を行い植林をし自然公園を作ってきました。また、荒廃した遊休農地を耕作可能な耕地へと復活させ、安全で安心な野菜等を作ってきました。

そして、昨年から本年に様々な実証実験を行い、我々がこれまで行ってきた活動をさらに発展させ、持続可能な地域の魅力づくり、地域の拠点として地域の資源を活かし活動の道筋が見えてきました。

今後は、この地域の独自性を生かし地域の資源を有効に使いながら、地域の住民が自由に参加できるコミュニティ・ビジネスとして、自主・自立した活動を展開していきたいと考えています。